

〔注意〕

答えはすべて、解答用紙の定められたところに記入しなさい。
本文には、問題作成のための省略や表記の変更があります。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「アニメーションとは、絵や物体（例えば、粘土、人形など）をコマ撮りなどで動かすことによって、生命感を得るものだ」という言説があります。

例えば、私が学生だった頃には、漫画家の手塚治虫さんが、『アニメーション』(animation)は『アニミズム』(animism)と関わりがある」というようなことをいっておられたことを記憶しています。万物に魂が宿るように、何気ない絵でしかないものにも生命を感じることもできるのだ、という思いをもって語られた言葉だったのかもしれませんが。

けれど、思えば、漫画家としての手塚さんが描いてこられた「動かない」漫画の絵の中にも、それぞれの登場人物の魂であるとか、生命感を感じることはできていたわけです。しかし、描いた絵をアニメーションとして動かすことで、あらためてある種の生命感を感じさせるのだとしたら、それは「人物への物語的な共感」などということとはまた違った、①別の次元、異なった意味合いのことであるべきなのかもしれません。

こうした思いを抱きながら、私はアニメーションを作る仕事にながいに携わってきました。今では「まるで、ほんとうにそこに生きている人物がいるみたいな印象」といつていただけの動きを作ることができるようにもなってきたような気がします。ありがたいことです。

ふと気づいたのは、そんな感想をいただけしたのは、「いかにもアニメーション！」というようなダイナミックな動きをお見せしたときよりも、ちまちましたささやかな動きを作ったときだった、ということでした。アニメーションでのびのびと快活な動きを作ることができれば、ときには現実の人間が動き得る限界を超えた魅力さえ示すことができるだろう、と思いませんし、たくさんのアニメーターたちがそうした思いのもとに鎚を削つてもきたのですが、その反対に、こじんまりと小さな動きをアニメーションの登場人物に行わせたときに、「どこか、ほんとうに人が存在しているという感触を味わえる」といわれる機会が増えてしまったのです。

このことは、「人はどのようなメカニズムで動く映像を認知しているのか」ということを理解しようとする知覚心理学の分野と関係していることもわかってきました。アニメーションで大きな動きを見るとときよりも、細やかで小さな動きを見るとときの方が、人はそれを②「ほんとうの動き」として受け止めるのではないか、ということでした。（中略）

もうひとつこのような経験の中からもなんとなく理解できてきたのは、アニメーション界の大先輩であり、惜しくも二〇一八年に亡くなった高畑勲監督が、ここ数年「異化効果」について触れておられたことの意味でした。「異化効果」とは演劇理論の中で語られる概念で、「日常的に見慣れたものを、見慣れない未知のもののように感じさせて、驚きを生み出す」というような意味でしょうか。

例えば、普段日常的に体験していることとして、あまり多くを感じずに通過してしまいがちな「食事をする」という行為。あるいは、そこで食べられるその料理。これをアニメーションの絵で上手に描き、巧みに動かすとき、「ああ、食べるってこういうことだったんだっけ」と確認するような気持ちが生じます。そして、あらためて「食べる」ということを噛み締めてしまうのです。現実には存在する人間が食べているのではなく、絵に描かれたものである場合の方が、「ああ、確かに食べるときにはこんなふうにしていたかもしれない」と、振り返るように感じる気持ちが生まれてくるのです。高畑さんは、「自分が使う『異化効果』という言葉は、本来、演劇の世界でプレヒトが提唱したものとは違うのかもしれないのだけれど、ア

ニメーションの作り手である自分にとつては意義深いもの」といつておられました。「見慣れない未知のもののように感じさせる」のではなく、「見慣れてきてしまったことの意味を再発見させる」のですから、確かに本来の意味合いとは違っているのかもしれませんが。実写と見紛うような写真的な絵よりも、③まるで絵本のような省略の行き届いた絵柄で、日常的な仕事をするときなどの方が、この効果は顕著であるようです。ちまちまとした動きを作る自分などを後押ししてくれる考え方もあるように思われます。

二〇一八年は、国際的なアニメーション映画祭などのような場では、従来のようなファンタジー的な趣向をこらしたアニメーション映画よりも、まるでドキュメンタリーのような題材を扱う作品が席卷していました。「内戦下のアフガンで生きる女性」「アンゴラ内戦に踏み込んでゆくジャーナリスト」といった映画が、別々の国から同時多発的に生まれ出てきたのです。

「なぜ、アニメーションでそんな題材を？ 実写で描くべきものではないのか？」という人もいました。自分自身も、「今まさに自分が表現しようとしていることは、果たしてアニメーションで描くべきものなのか？」というふうに考えることは、アニメーションの作り手である以上、常に心の中に置いておかなければならないことだとも思いながらこの仕事についてきました。ですが、④高畑さんの「異化効果」に鑑みれば、アニメーションがそうした題材にまで手を伸ばすことは間違いなく、意味のあることなりました。

今は「アニメーションで描くべきこと」そのものが拡大している時期であるように思います。自分がこれまでやってきたことの意味、これから為していくべきことを、明確に言語化して捉えていけたら、と思います。

(片淵 須直「『アニメーション』を考える、ある視点」による)

〈注〉 アニミズム……自然界のあらゆる事物に靈魂が宿ると信じる考え方。 ブレヒト……ドイツの劇作家。
アフガン……アフガニスタンのこと。

問一 —— ①「別の次元、異なった意味合いのこと」とは、具体的にはどういふことですか。

問二 —— ②「『ほんとうの動き』として受け止める」とは、どういふことですか。

問三 —— ③「まるで絵本のような省略の行き届いた絵柄で、日常的な仕事をするときなどの方が、この効果は顕著である」とありますが、なぜですか。

問四 —— ④「高畑さんの『異化効果』に鑑みれば、アニメーションがそうした題材にまで手を伸ばすことは間違いなく、意味のあること」とありますが、これについて次の(1)・(2)に答えなさい。

(1)「アニメーションがそうした題材にまで手を伸ばす」とは、どういふことですか。

(2)なぜ「意味のあること」なのですか。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

リビングで、もう長いこと、ぼくは画用紙を眺めていた。これは夏休みの宿題だ。自分でぜんぶ考えて『あかるい選挙ポスター』を描かなければならない。でも、どうしてなのだろう。絵を描くのは好きだけれど、宿題となると気分が乗らない。パレットに絵の具をしぼりだし、絵筆をぬらす。とりあえず風船を描いてみる。風船は黄色く、ばかでかくなった。選挙っぽいかんじをだすために、風船のしたにひもを数本結わえ、箱を足して、気球に変更した。画用紙が湿ってかんじるほど蒸し暑い。午前十一時、おもては、かんかん照りだった。

① 困ったことになった」

と、携帯電話を片手に、お父さんは言った。

「なにが？」

と、筆先から顔をあげず、ぼくは訊ねた。

気球の背景は何色にしよう。別の紙にためし塗りをし、筆を迷わせる。ぶなんなのは、やっぱり青空だ。それとも赤い夕焼け空。星をちりばめた夜空。かみなり雲や、入道雲というのでもいいかも知れない。

「俺の後輩が、はじめて技師として、今回、映画をやっているんだが、どうも監督に無理難題をだされたらしくてね」

「ふうん」

「手助けして欲しいと泣きつかれた」

「へえ」

「そいつは、まだ未熟で、経験も浅い。技師になるには早かったんだよ」

「そっかあ」

「夏休みはもう終わりだ」

「え？」

驚きのあまり、ぼくはお父さんをみた。

お父さんはうつむいていた。いかにも「申し訳ない」といった姿勢で、でも「自分のせいじゃないのだから見逃してくれよ」と、開き直っているようにもみえる。ぼくは水色で空を塗り終えたところだった。絵筆を置いて、お父さんの言葉の意味を考えてみる。夏休みが終わるということ。それはつまり、ぼくをここに残して仕事にいくということだ。また約束を破られた。そう思ったら、頭にかつと血がのぼった。

「ひどいじゃないか！」

ぼくは言った。

「そうだよな……その通りだ。ほんとうに、ひどい。ひどいんだが、その仕事は……」

お父さんがしどろもどろになったって、ぼくは今度こそ、絶対に許さない。

「その仕事は、なに？」

速攻の先制パンチでつつこむと、

「もともと、俺が引き受けた大事な仕事だったんだ。それを急に、こっちの都合で代わってもらったわけだから。だから……責任をとらなきゃ、まずい」

言いにくそうに、お父さんは答え、

「そんな大事な仕事を、どうして代わってもらったりするんだよ」

ぼくは容赦なくストレートをお見舞いした。

ノック・アウト！

カーン、カーン、カーン、と、ゴングが鳴りわたる。

「俺が夏休みをとるためには、ほかにどうしようもなかったんだ」

お父さんはうなだれた。

ぼくの拳はお父さんの顔面にはいり、お父さんはリングに倒れたも同然で、ゲームの勝者はぼくだ。②しかし同時に、敗者もぼくだった。

あんなに忙しかったお父さんが休みをとってくれたこと。休みをとったせいで、大事な仕事を、他人にあげなければならなかったこと。いま、そのひとに迷惑をかけていることも、すべてはぼくのせいだった。ぼくに反論できる余地はない。

でも、ぼくは「わかった」とは言えなかった。お母さんには、どんなに嫌だと思ったことでも平気なふりをして、そう言えていたのに。③お父さんには言いたくない。

描きかけの絵をつかんで、ぼくはたちあがる。すでに、選挙ポスターを完成させる気力はなくなっていた。ぼくはまた、なんにもしたくない病になるのだろう。あの平和な時間が終わった瞬間——お母さんがいなくなった日のように。すこし思い出ただけで、だるくなり、ちからが抜けていく。のろのろとテーブルのうえを片付け、パレットと絵の具箱と絵筆バケツをもって、ぼくがリビングをでようとしたとき、

「なあ」

声が聞こえた。

「葉太、俺の仕事を手伝ってくれないか？」

と、お父さんは続けた。

仕事？

誰に問うともなく、頭のなかだけで、ぼくはくり返した。

お父さんが仕事している姿を、ぼくはまだ一度もみたことがない。どんなことをしているのかも、よくわからない（お母さんは何度も話してくれたけれど、お父さんからはまともに聞いたことがない）のに、いきなり手伝うだなんて。

そんなことできるのだろうか？

想像もつかないけれど、ぼくの鼓動は高鳴り、勝手にわくわくしてきてしまう。

「わかった」

自分の部屋へむかいながら、ふてくされた声をよそおって、さりげなく答えた。④ふり返るのは恥ずかしいので、わざとまえをむいたままで。

（唯野 未歩子『はじめてだらけの夏休み 大人になりたいぼくと、子どもでいたいお父さん』）

〈注〉 お母さんがいなくなった……「お母さん」が病氣療養のために別居することになった。

問一 — ① 「困^{こま}ったことになった」という言葉を、「ぼく」は最初どのように捉^{とら}えていますか。

問二 — ② 「しかし同時に、敗者もぼくだった」とは、どういうことですか。

問三 — ③ 「お父さんには言いたくない」とありますが、なぜだと考えられますか。

問四 — ④ 「ふり返るのは恥^はずかしい」とありますが、なぜですか。

三 次の文を、カタカナは漢字に直し、ていねいに大きく一行で書きなさい。

オシえるはマナぶのナカばなり

四 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

合唱

谷川 俊太郎
たにかわ しゅんたろう

遠くの国で物のこわれる音がして
幾千万のちりぢりの会話が
終日僕を苦しめる

多忙な時間

非情な空間

机の上の英和辞典に

何かしれぬ 憤りを覚えながら

僕は地球の柔らかい丸味を

実感したいとおもっていた

その午後

未来は簡単な数式で予言されそうだった

そしてその午後

合唱という言葉が妙に僕を魅惑した

問一 — 「僕を苦しめる」とありますが、「僕」はどういうことに「苦しめ」られているのですか。

問二 — 「未来は簡単な数式で予言されそうだった」とは、どういうことですか。

問三 — 「合唱という言葉が妙に僕を魅惑した」とありますが、「僕」はどういうところに引きつけられていますか。

四		
問三	問二	問一

三

二			
問四	問三	問二	問一

一		問三	問二	問一
問四	問三	問二	問一	問一
(2)	(1)			

解 答 用 紙

令 4
中
国

受験番号
氏 名

評 点